

\bigcirc		
\circ	from the -	名 前:ビビアニ ハルミ (Viviani Harumi)
\bigcirc		年 齢:27歳
\bigcirc		国籍:日本
\bigcirc		ルーツ:日本、ブラジル
\bigcirc		
$ \bigcirc$	THE STATE	多文化ファシリテーター
$ \bigcirc$		

父は幼少時に移民として渡伯した。同様に私も幼少時に来日した。

ブラジルを離れてなんと17年が経過し日本の生活の方が長くなってしまった。

来日後、公立の学校に編入した。日本語がまったく解らなかったので、新しい環境に順応するまで時間が かかった。その学校の初めての外国人ということもあって、とても新鮮に受け止めてもらい、言葉が通じなくて も友達がたくさん話しかけてくれた。しかし、日本語がまだ話せなかったことから時が経つにつれ友達がだん だん減り学校に行くのが嫌になったが、早く日本語を覚えようと一生懸命に勉強した。一年が経過しないうち に両親の仕事の都合で浜松に引っ越すことになった。浜松の学校には、すでにブラジル人がいて、同じ国の 人に会えてとても嬉しかった。

中学では、人間関係でも勉強でもかなり苦労した。こんな苦労が続くなら学校にも行きたくないと思ったし、 勉強を続ける気持ちもなくなった。けれど、日本語を教えてくれた先生からいつブラジルに戻るのかも分からな いのだからと定時制高校に進学するように勧められた。先生が応援してくれて進学を決めた。

高校では、勉強とアルバイトを両立させ充実した学校生活を送ることができた。クラスにブラジル人が他にもいたので、とても心の支えとなりみんなで教え合い助け合った。家計と学費のためのアルバイトをやっていたので大変だったが、無事卒業することができた。支えてくれた先生方や友達に感謝している。

未だに日本で暮らしている私にとって、諦めないで努力を続けたことは本当に良かったと思う。それによって、 今、私は日本語とポルトガル語の両方を使い不自由なく仕事も生活も出来る。将来どこで暮らすかは、まだ分 からないけれど、どこに暮らすにしても努力は必要だと強く思っている。学校を中退した人や夢を諦めかけて いる人がいるならば、やれる所まで頑張って欲しい。いつでも再出発はできる。

私は、二つの文化を持っていることをとても誇りに思っている。どちらかを選択するのは不可能であり、一つ を選ぶと何かが欠けてしまう。私にとって二つの文化やルーツは、私の大切な要素だ。

活動案:ステレオタイプを解消

1. 目標

外国人に対し、特定の共通したイメージを持っていると、時には偏見と差別につながってしまう。 そこで、自分の持っているステレオタイプが外国人を個人で見たときには当てはまらないことを改 めて確認する。「〇〇人」という塊で見るのではなく、「〇〇さん」という個人で見ることの大切さ を再認識する。

2. 実践者名

ビビアニ ハルミ (Viviani Harumi)

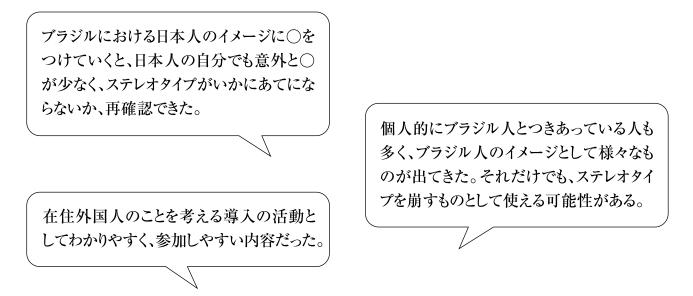
3. 対象者

小学生高学年以上~一般

- 4.時間 30分
- 5. プログラム進行表

時間	活動のねらい	展開(具体的活動内容)	準備物
10分	「ブラジル人」の イメージを 出し合う。	「ブラジル人」のイメージはどんなものか、質問 する。 個人でポストイットにいくつか書いてもらう。 近くの人と4人組になってどんなイメージがあ るかポストイットを発表し合う→全体に発表し てもらう→ホワイトボードに書き出していく	ホワイトボード マーカー ポストイット (1人5枚程度) 鉛筆
10分	ブラジルにおける 「日本人」のイメー ジを発表。 「日本人」のイメー ジが個人的には あてはならないこ とも多いことを確 認する。	次に、ある一覧表を配り、それに自分が当ては まるかどうか○×をつけてもらう。 →そのイメージに各自があてはまるかどうか 印をつけていく。 →先ほどのグループで見せ合う。 (種明かし)実は、これはブラジルにおける「日 本人」のイメージだということを発表。 一覧表を順番に読み上げて、○をつけた人 に手を挙げてもらう。	日本人のイメージの 一覧表 (内容例:頭がいい、 算数が得意、目を合 わせない、毎日刺身 を食べる、ゲーム好き、 金持ち、信用できる、 冷たい、勤勉、恥ず かしがり屋、相撲をと る、パソコンが得意、 まじめ、背が低い、大 人しい)
10分	まとめ	実践者の体験をもとに、ステレオタイプを押し 付ける危険性について確認する。例)「ブラ ジル人だからサンバは踊れるでしょ」といった 思い込みや偏見を押し付けられた経験等を 話す。	

受講者の声







■多民族社会ブラジルに生まれて

ちょうど23年前・・・・・ ブラジルで生をうけた。

白人も黒人も、あらゆる人種が住む多文化な社会、そして西洋も東洋も交錯する多文化な家系に、自分はいた。

自分の家系は、母方の祖父母は日本の血を引き、父方の祖父はスペインと南米先住民、祖母はドイツとトルコ の血を引いている。物心つき始めたころから、両祖父母間で西洋と東洋の文化、風習、食、生活自体に違いを 感じ始めた。

それは父方の祖父母の家にいた頃の話。

ブラジル料理も出てくるが、頻繁に食卓に顔を出していたのが「ドイツ料理」。ソーセージとじゃがいもをベース にした煮物やスープ、日によってはそのまんまグリルにした状態で出てくることもある。食事スタイルは、白飯か ら野菜まで豪快に大皿に盛って食べるというもの。祖母はケーキやお菓子作りが得意でホームメイドのケーキ やドイツ風味のお菓子がいつもあった。トルコ料理はよく覚えていないけど、コーヒーがよく飲まれていた記憶 がある。粉っぽくてものすごく甘かった。これはトルココーヒーの影響だろうか……。

祖父は若いころから音楽をやっていて、既にレコードを何枚か世に出していた。時たま思い出したかのように 部屋でアコースティックギターを引っぱりだしてはよく弾き語っていた。「時を超え、世代を超え、人種を超え、言 語を超え、同じ人間と分かち合えることが出来るもんは音楽や!」とその時は実感した。多分、自分と音楽の出 会いはここから始まったと思う。風習はドイツ家系の影響が強くて礼儀やしきたりが厳しいところもあったが、今 思えば、日本の風習に似ていて、何か共通していたものがあったと思う。

話変わって、母方の祖父母の家での話。

玄関を開けると立派な木造りの仏壇が姿を現し、続いて家の中に海苔、昆布、漬物といった日本食から、さら に、炊飯器やビデオデッキなど日本製品が使われていた。祖父が愛読していた日本とブラジルの記事が載っ ていた「São Paulo Shimbun(サンパウロ新聞)」や「made in JAPAN」という雑誌もある。このように何から 何まで日本尽くしだが、食事はもっと驚愕。祖母は小さい小鉢に白飯をよそってから、味噌汁、おかず、野菜も 綺麗に1つ1つの小鉢に盛っていく。祖父は白いご飯から野菜まで豪快に盛るブラジリアンスタイルを「豚のエ サ」だといい毛嫌いしていた。食事は器用に2本の長い木の棒を使って食べていた。その正体が後で「箸」 だと分かった。 祖父はブラジルへ来てから新聞記者をやる傍ら、作家としてもう一つの顔を持ち、晩年まで「別所愼ノ輔」という名で執筆活動をしていた。「物書き独自の想像力豊かな感性」、「本を読んで理解すること、批判すること」 を教えてくれた祖父。思えば、「日本語」との出会い、「日本」に対する大きな夢と憧れを抱かせてくれたのも祖 父だった。

父方の祖父母の家で過ごすことが多かった自分にとっては、母方の祖父母の家での経験は、今までにない新 鮮なものだった。お互いを比べれば比べるほど、どんどん目に見えてくる西洋と東洋のギャップ。「当たり前」 の常識が覆る瞬間はなぜか気持ちいいのだ。あまりに極端すぎる違い、しかし自分はその違いを受け入れる ことが出来た。

やがて、学校にあがる年齢になり西はヨーロッパ、東はアジア、南はアフリカを背景に持つ仲間達に出会うことが出来た。彼らと共に学び、一緒に遊び合ったことで、お互いに刺激を受けた。

■祖父母の国、日本へ

それから数年が経ち、ブラジルを離れる時がやってきた。

その当時、「ブラジル」は経済情勢が悪化し仕事がなくなっていた。反対に「日本」は人手が不足していた。 両親はインフレ2000%を超えるブラジルに見切りをつけ、母方の兄が一足先に働いていた「日本」に希望を 託した。

その頃、10歳を迎えたばかりの自分には想像もしなかったシナリオ。

目指す先は地球の裏側、「日本」。 先祖達が憂い、想い、戻れなかった祖国。

さらに、あれから10数年が経った……。 今、自分は生きている。ここ、祖父の生まれ育った祖国……日本。

これまでの人生をいろいろ振り返ってみると本当に濃くて長かった。 ある時は感動し、またある時は涙を流したこともあった。よくあることでは、普段は日本人として接してくれるが、 何か失敗した時に浴びせられるお約束の一言・・・・・。

「だから、ガイジンはダメなんだ。」

何がダメだ?何をやってもガイジンだからダメなのか?今でもその言葉の真偽は分からないが、心を深くえぐられる言葉だ。これほど抽象的でその人間の存在自体すらを全否定出来る言葉って存在するんだなと初めて知った。根拠もないのに型にはめて、こうやって言ってくる人間が大嫌いだ。

実は、親友、彼女、仲間っていう関係を簡単には作らない。よっぽど惹きつけられることがない限り、今でもそう は言わないようにしている。 だけど、昔ある一人の男と出会った。彼と語り合っていくうちに、ふと「日本人」「ガイジン」の話になった。「ガイ ジン」の友達がいなかった彼と、「日本人」の友達がいなかった自分。すると、彼は「お前がブラジル人やろうと 何人やろうと関係ないで。国籍なら変えよう思えば、そんなんオレにも出来んねん。せやけど、シルバユキオっちゅ う奴は他におれへん。オマエー人だけや。そやから一人の人間としてオマエと友達なりたいねん。」と話して くれた。そう言われた時、初めて一人の人間として認めてもらえた気がした。 もちろん、彼は今でも親友だ。

こんな調子でいいことが続けば、必ず嫌なこともそれ相応に返ってきた……。

今でも日本に来た意味を考えることがある。これは運命なのか、それとも……。

運命なんかあってたまるか、あるなら抗ってみせたる!と日々心の中で想っている。実は、もう祖父を2人とも亡く している。だけど、2人とも自分が日本へ旅立つ最後の瞬間まで元気に見届けてもらえた。旅立つ時、今日本 に行ったらもう二度と2人に会えないという気持ちが頭をよぎった。実際その直後に母方の祖父、4年後に父 方の祖父はこの世と別れを告げた。彼らは生きて見届けてくれたが、自分は彼らの旅立ちを見届けることが 出来なかった。今までにブラジルを離れたことで一番辛い出来事はこれに尽きる。

子どものころ、親から「日本の学校でケンカで負けて泣いて帰ってきよったら、絶対許さへんで!戦え。負けたら あかんぞっ!」とよく一喝されていた。日本へ来て日が浅い頃、言葉も出来ない、周りは見たことも無い連中ば かりで、何とかして必死で外面だけでも強くして生き残りたかった。その強がりがエスカレートして人間関係で 何かあるごとに相手をどつきまわっていた。そう、口より腕っ節でものを言っていた。

そんなある時だった。高校生ぐらいになって、親に「オマエはよう人どつくけど、やられてる相手のこと考えたこ とあるんかい?何やいつも腕っ節で解決しとるみたいやけど、正しい時もあれば、間違えてる時もあるで。考え たことある?口は何のためにある?何のためにおつむがある?ほんまに強いもんは腕やのうて、おつむ使うて物 事を解決させるんや。分かるか?」と言われた。親のその一言で、今後の自分のことを考えるようになった。

それから、初めて自分が外国人という少数派の立場にいて、風習も、価値観も違うと気づいた。お互いに分かり合えず、時には相手と本気でケンカしたこともあった。ケンカ腰で相手に自分の価値観を分からせるのがいかに難しいかよく分かった。

歳を重ねるごとに「知らなかったこと」や「見えていなかったこと」が、自分の目で見えるようになった。

例えば、関西に住んでいた頃。周りにブラジル人の存在はなく、いわゆる「ブラジル人コミュニティ」もなかった。 だからブラジル人が社会で抱えている悩み、不満、苦労などは、関西を出るまでは想像すらつかなかった。そ の当時、新しい道を歩む自分にとって、多くの人と触れあい、一人でも多くの友達を作って関西の生活に溶け こんで、親を安心させること、そして地元の人間に認めてもらいたいという気持ちで、常に前向きに生きていた。

しかし、浜松へ移り住んでからブラジル人コミュニティがあり、ブラジル人のほとんどは製造業の工場で働いて いるということを初めて知った。社会にうまく溶け込めず、常にコミュニティの中で不満や寂しさを分かち合い、 同い年の外国人の子どもが学校に馴染めなかったり、いじめや差別に苦しんでいることも初めて分かった。 そして、今、自分と同じ世代の人たちは何を想い、何を夢見て、「お前どこのもんや?」と聞かれた時に彼らはど んな答えを返すのか、ものすごく知りたくなった。どうしたら彼らに出会うことが出来るのだろうか。

■多文化教育ファシリテーター養成講座に参加して

そして、多文化教育ファシリテーター養成講座に参加することに。よくあるような国際理解教育講座かと想像 していたら、それが全く違う新しいスタイルの講座だった。まず、全プログラムが英語で進行していたこと、宿題 があったこと、ルーツや自分のアイデンティティと向き合えたこと。自分達と対等に話が出来るし、ノリもよくて、人 を見かけで判断もしないし、自分の子どものように接してくれるMr.Jon。

初めて会った時から、日本での外国人としての心や差別問題を熱く語るひょうまさん。今の日本で起きている 問題の解決に取り組む意識が高く厳しい人。自分の信念をちゃんと持っていて尊敬すべき人だ。彼のベトナ ム難民の話、今のベトナム人コミュニティの現状を話してくれた。いい刺激をたくさん受けた。

自分がこの講座に参加した理由。それは、人と出会う、縁を作る、人に刺激を与え、自分も刺激を受けるため。 そして多文化共生のこと、アイデンティティのことを真剣に語り合いたいと思ったことがきっかけだ。自分と同じ 若い世代の人が何を経験してきて、何を想ってここにやって来て、どんな話をするのか聞きたかった。生半可 な気持ちでは臨めないと思い、気合いを入れなおしてから参加した。

今振り返ると、この講座の内容は自分の成長に繋がった。本当に多くを学ばせてもらった。多文化共生には色々 な見方があって、いい面、悪い面があるということ、見た目や国籍だけでは、判断出来ないこと、頭で理解して ても行動しなきゃ始まらないこと、TCK (Third Culture Kids)のこと、自分がまだまだ勉強不足だったこと。

「考える前に行動する」「ごちゃごちゃ考えずにまずやってみる」

講座が進んでいくごとに、この2つの言葉が浮かんでくる。当然、自分の人生にも深く関係する。無茶を勇気と 勘違いしないように、日々自分と闘っていかなければならない。

■熱い思い

そんなこんなで自分がファシリテーターとして成長していく中、今、現状に起こっている事実を知って行くたび に、心の中で一種の炎がめらめらと音を立てて燃え始めた…。

それが…… "BURNING ISSUE" (熱い思い)だ。

もし、この先に日本人と外国人の共栄共存を望むなら、この瞬間お互いの間に起きている問題を上っ面だけ の綺麗ごとだけで片づけるのじゃなくて、本音でぶつかり合わないと解決出来るはずがない。 例えて言うなら、教室に掲げてある今月のめあてに「仲良くしよう」と景気よく掲げ、みんなはそれを見て頭で は「守らなきゃ、仲良くしなきゃ」としても、偏見丸出しの態度や差別を繰り返し、行動では全く守っていないと いうもの。

先入観で物を考え、「英語」「外国人」「外国文化」を無条件でかっこいいと思う時があれば、全く逆に無知 や先入観から来る「偏見」「差別」「勘違い」を外国人に押しつけてしまう日本人。 「腫れものに触わる」「外国人はかわいそうだから仲良くしてあげなきゃ」という精神でやっていてはいつまで 経ってもこの世は変わらないまま。そうではなく、もっと本音をぶつけてほしい。

ガイジンから外国人、外国人からブラジル人、ブラジル人からシルバ ユキオという人間まで辿り着き、正体を知るまでに、いくつのも心の壁がなくなって、はじめて本音を語ることができる。

これからはよく言われる「多文化共生」の時代。一見、「新しい文化・価値観との出会い」というプラス面をも たらすように思える言葉。しかし、実際はもっと大変になると思う。異なる文化や価値観を受け入れることには 必ず摩擦や軋轢がともなう。身近な所から怒り、不安、不満などが、目に見える形で必ず現れてくる。そのよう な中で自分に要求されるものはもっともっと大きくなると思う。だけどその分、がんばるしかない。成長する機会 をもらったと思って感謝するのみ。この先はどうなるかなんて分からないけど、考えるより行動したい。これから は色々な場で自分の思いを伝えていくことになる。まず地道に色々な人と語り合い、自分たちのことを理解して、 受け入れてもらえるように、最大限、自分に出来ることをしていきたい。

活動案:「移民」するってどういうこと?

1. 目標

「移民」とは実際どういうものか、また移民の子どもが抱える問題として「アイデンティティの悩み」や「ダブ ルリミテッド」について理解を深めてもらう。

2. 実践者名

シルバ ユキオ

3. 対象者

中学生以上~一般

- 4. 時間 30分
- 5. プログラム進行表

時間	活動のねらい	展開(具体的活動内容)	準備物
10分	自己紹介を交えて 自分のルーツを紹 介し、移民につい て理解をしてもらう	自己紹介 日系ブラジル人について説明。自分もその一人で あるが、ブラジル人にも日本人にも見えない。自分 は何人なのか?一体どこから来たのか? 自分の家系図を描きルーツを紹介する(BGMに のせて)。 「日本」「ドイツ」「トルコ」「スペイン」「インディヘナ」 日本からブラジルへの移民 ブラジルから日本への日系人の移動(入管法改正、 ブラジルでの経済状況の悪化なども説明)	ホワイトボード マーカー BGM・ステレオ 国名の表示 セロハンテープ
10分	移民の第2世代の 教育について考え てもらう	質問を参加者になげかける「もしあなたが外国に 移民するとなったら、子どもに現地の教育を受け させるか、自国の教育を受けさせるか」 →グループで話し合う →発表してもらう	紙(A3サイズ)
10分	移民の第二世代 の当事者の抱える 困難さ、たとえばダ ブルリミテッドやア イデンティティの問 題について理解を 深める	移民の第2世代である子どもたちの悩みについて 話す ・ダブルリミテッド (母国語と外国語のどちらも限定的で、両方と も十分発達してない状態、もしくは年齢相応に 使いこなせない状態) ・不安定なアイデンティティ (見た目と意識の違い)	

受講者の声

家系図を使った説明は分かりやすくインパクト があった。通常、日本人はあまり家系図を気に することはないので、移民をして様々な民族が 混ざっていくことがどういうことなのかイメージ が湧かないが、家系図を示されると、少しイメー ジができる。

当事者の話としてのインパクトが強かった。ブ ラジル人の子どもにとってロールモデルになっ てほしい。 実践者が自分の言葉でアイデンティティの悩み を語ったことは効果的であった。



0 -	
0	名 前: 高橋 ひょうま (Nguyen Khanh Thien/阮 慶 禅)
0	年 齢: 27歳
O BOA	国籍:日本
0	ルーツ: ベトナム
0	
0	多文化ファシリテーター
0	

■多文化教育ファシリテーター養成講座に参加した理由

僕が、今回この講座に参加した理由、それは「自身のアイデンティティ」に対する疑問があり、それを解消、 または何かヒントになるものがあるのではないかと思ったからです。

1982年、僕は生後三ヶ月で、インドシナ難民として日本に来ました。小さい頃から両親は、僕が日本で不自 由なく生きて行けるように、ベトナム人コミュニティから距離を置き、あえて、日本人ばかりの環境で僕を育て ました。だから、自身のアイデンティティと深く向き合うことなく、「日本人」として育てられ、自分も「まぁ、日本人 で…」と、深く考えることなく生きて来ました。しかし、数年前に日本国籍を取得する時にふと、明日から「日 本人」になることをこんなに簡単に決めていいのか?という疑問が生まれました。「日本人」として生きて来 たけれど、だからと言って、僕の生まれた場所はベトナムであり、両親も、生活習慣も、価値観も、「ベトナム人」 という意識もあります。結局、限られた時間の中で答えを出すことができず、僕は「日本人」を選びました。

それから「日本人」として、どこか心に雲がかかった状態のまま、関西の会社に就職しました。そんな中で 出会ったベトナム人コミュニティ。その方たちは自分たちの「ベトナム人だ!!」という確たるアイデンティティを 社会に意思表示していました。僕は驚きとともに、どこか羨ましい気持ちがありました。改めて、自分を「日本 人」と名乗ることに抵抗感が強くなり、かといって「ベトナム人」を名乗るにはベトナム語は話せないし、ベト ナムの何を知っているのか、と自分に問うてしまいます。

それまで浜松から離れて関西で暮らしていましたが、これを契機に自分の中で空白になっている「ベトナ ム人」という部分を埋めようと家族のいるこの街に帰って来たのです。

何かをしたいと考えていた時、この多文化教育ファシリテーター養成講座のお話を頂きました。そして、この講座には、他の外国にルーツを持ち日本で生きている同世代の若者もくると聞き、その人たちは自分自身 を「何人」だと想っていて、また、それはどうしてなのかを知りたくて参加したのです。

■講座で学んだこと

講座を通して学んだことはたくさんあります。それでも一つあげれば、「あれができない、これができないと 言っているうちは何もできはしない」ということです。

僕は、どこにいても、どんなに時間がたっても、常に「自分は外国人」という、変えられない事実に対し、い つ、どこで切り捨てられるかわからない不安にかられてきました。実は、僕が以前に勤めていた会社では、「〇 〇人は、仕事が雑で信用できない」や、「〇〇人には難しい仕事を任せるな」といった言葉が飛び交ってい ました。日常の中に、外国人に対する「差別・区別」が当たり前のようにあるのです。僕は、その環境がとて もショックであり、恐怖でもありました。なぜなら、立派な大人が、平然と人が感じるであろう「痛み」も考えら れずに言葉を発せられるほど、彼らにとって外国人の存在は遠く、かつ、優劣を付け、見下しているように思 えたからです。 だから、もし自分が外国人(ベトナム人)とばれてしまった時、彼らは今までと変わらない態度、姿勢で向き合っ てくれるか疑問になりました。無意識のうちに外国人に対する「差別・区別」が生まれるのであれば、その 意識を変えるのは簡単ではありません。意識的に、時間をかけて、根気よく向き合って改善をしなければな らないと思います。しかし、僕はいち会社員です。仕事もありますし、生活もあります。声をあげてまわりに何 かを訴えるには、背負うリスクが大きい割に、効果が見込めません。僕は、仕方なくその現場をやり過ごす日々 でした。

他の外国人も、このように、当たり前にある「差別・区別」については仕方ないと諦めていると思います。 見下されている自分の声が届くはずがないし、場合によっては危険が伴います。だからこそ、選択肢は「沈 黙」になり、しだいにそれが体にしみ込み、社会に合わせるために自分に嘘をついたり、傷つけられても鈍 感になり、矛盾や暴力に目をつぶり、小さなコミュニティの中で孤独や寂しさを分かち合うようになるのでは ないでしょうか。そうなると、生きる目的が、次第に色あせて、形を変えて行きます。いつからか、自分が外国 人という、マイノリティな立場にいることにより突きつけられる問題に対して、「どうせ、自分にはできない」と 最後には諦めて、流れに身を任せるようになってしまうのです。

でも、結局、それをしたら「何もできません」。人が何かを行動すること、行動できることは有限ですが、その有限から無限の可能性が生まれると思います。

こういった議論を講座の中で重ねるうちに、僕は、ここだけの議論で終わらせたくないという気持ちが次 第に強くなっていきました。そして、社会に対して問題提起してみたい気持ちが高まり、メディアの力をかり て、あるテレビ番組で、「日本にいる外国人が生きやすくするためにはどうすればいいのか?」を、同世代の 日本人に問いました。

そこで感じたことは、みんな「外国人」に対して無関心ということです。最初は「偏見はない」とか、「受 け入れたい」、「外国人の友だちはいるけど、日本人と同じように接している」というような発言ばかりでした。 この発言は、一見友好的に思えますが、実は深く考えていなかったり、表面だけを分析し、問題を他人事と してとらえていたのです。しかし、議論が深まるにつれ、実は、自分の仕事を外国人が安い賃金で請け負う ことにより、仕事量が激減したり、請け負い価格が下落したりしている、また、職場に文化の違う外国人が 働くことにより衝突が起こる、といった問題があったのです。こうして、自分の生活に直接外国人が関わるよ うになった時に出た言葉が、「建築業界の単価を下げてきた責任の一端は外国人労働者にあるんだ。(略) 俺たち日本の労働者を苦しめるなら今すぐ国に帰ってくれ」とか、「関わるのメンドクセー」です。これらの 言葉を聞いた時、僕は、呆然となりました。遠く離れた別の社会においても、僕が経験してきた社会と変わり がないことへ驚き。それと同時に、外国人が長く暗い闇の中でさらされる暴力に対し、少しでも改善したい 心内を、一人でも理解し、後押ししてくれる人がいるはずと、心のどこかで期待してのいたに、現実は、後押 しどころか、否定的な想いが多かったのです。正直、ここまで現実を突きつけられ、淡い期待を砕かれると、 「なんでわかってくれないんだ!?」という想いより、「自分が間違ってるのか!?」という気持ちになります。改 めて現実が険しく、厳しいことを痛感しましたし、何も考えられなくなりました。

しかし、だからと言って、気持ちが折れるかと言えばそうでもありません。なぜなら、こんな社会でも、自分 自身の信念のもとに向かい合う人たちもいます。僕の行動に賛同し、助勢をしてくれる人もいます。そんな 人たちが、少なくとも僕の行動を見守ってくれています。改めて、「ありがたい・・・僕は、独りじゃないんだな」 と感じました。それなら、気持ちを変え難い人たちのほうが多いけれど、今は、その人たちのことはいったん 置いておいて、理解や興味を示す人たちに向けて行動することが最善ではないかと思ったのです。自分 にできることは小さなことで泥にまみれる時もあるけど、大事なのは継続して、僅かな変化でもいいのでそれ を絶やさないことなのではないかと思います。 また、実は、みんなが全ての問題に関して無関心かと言えばそうではないのです。みんな、障害者問題、雇 用問題、伝統芸の継承問題というように、自分が関心を持つ問題に対して真剣に考え、少しでも改善するよう に取り組んでいるのです。僕は、複雑化するこの社会において、個人に降り掛かる問題は重複するのではな いかと思っています。一つの問題だけが解決しても、必ずしも幸せにはなりません。自分自身が関心を持つ小 さな問題を確実によい方向に転換できれば、たとえ、それが他の問題と接点がなくても、いつか「個人」で重な り、よりよい幸せに向かうのではないかと思っています。

今回、国際理解教育の講座や、テレビ番組を通じて社会に発信した結果、僕は社会が思う以上に広く、消極的なものだと知りました。それでも、僕が行動することにより、今まで無関心だった人の中から外国人の抱える問題や、ベトナムという国について興味を抱いてくれる人が現れました。だからこそ、行動するのは当然ですが、それを限られた時間や資源の中で、自分のできること、自分しかできないこと、自分もできること…のように整理することも大切だと思います。自分の問題にだけに関わるのではなく、問題提起されているものであれば、他の社会問題にも積極的に取り組みながら、自分の行動をバランスよく振り分け、時には助けてもらい、効率よく主張していくことが大事だと気づきました。

■ "Burning Issue"「熱い思い」

僕の「熱い思い」、それは、いかにしてベトナム人コミュニティから「有名人・著名人」を出すかです。

今、多くのベトナム人は製造業の工場の仕事に従事しています。そうなると、そういった大人を見て来たベ トナム人の子どもたちは、それが「見本」と思い込んでしまいます。実際、僕が小さい頃から、両親や親戚の多 くも製造業の仕事をしています。勿論、工場の仕事を選ぶことは悪いことではありません。ただ、あまりにも子ど もにとって「選択肢」が少な過ぎます。だから、小さい頃から自分の将来や夢に対してドライというか、閉鎖的に 感じることがあるのです。

本来、子どもの頃は失敗してもいいし、具体的な夢や希望も定まらなくていいのです。日々成長する中で、少 しずつ自分ができること、自分にしかできないことを見定め、自由に想いを馳せればいい時期なのです。しかし、 現状はそういったことをする、しない以前に、考えることをしないように思えます。でも、それは言い換えれば、ま わりに工場で働く大人しかおらず、それが自然に「見本」になって、その後を追うことが当たり前になっている からです。子どもにとって、「工場従業員」以外の「見本」になるような人間が生まれれば、「そういった選択肢 もあるんだぁ」と、その生き方を真似ることができます。

なぜそう思うかと言えば、僕の両親は、小さい頃からやりたいことをやらせてくれてきたからです。いきたい 学校にいかせてもらい、いきたい専門学校にいかせてもらいました。職業だって、自分の就きたい仕事に就け ました。その背景には、両親がベトナム戦争により勉強する場所も機会も奪われたまま今に至り、それでもなお 勉強したい気持ちが捨てきれず、その想いを僕や妹に託してくれているからです。

両親は、ベトナム戦争後、敗戦側に押し付けられる「強制された生き方」を経験したからこそ、自分の子ども には「強制された生き方」をしてほしくないのだと思います。その両親の気持ちは、まわりのベトナム人から、「勉 強することより、働くことが両親のため」といわれ、進学に対し批判的な言葉を浴びせられても変わりませんで した。両親はいつだって、僕たちが将来に対して自由に発想できる環境を整えてくれていたのです。

結果、僕はたくさん勉強することができました。たくさんの知識や知恵が付きました。社会に対して意思表示できる人間になれました。そうした中で感じたことこそ、子どもが未来に対して遠慮せずに意思表示できる 環境づくりが不可欠なのであり、その延長線上に外国人の置かれている環境が変化する糸口があるのでは ないかということです。 現実問題として、多くの外国人の子どもが、自分の望むように進学できないことがあります。ただ、そこででき ないといって終わらせたら何も変わりません。その気持ちが消えないためにも「見本」が必要になるのです。「あ の人のようになりたい」と強く思わせるような人が現れれば、両親も子どもも、未来に対して前向きに模索をす るのではないかと思います。だからこそ、「見本」はなるべく大きな影響を与えられるような人が望ましいのです。 その人の影響が大きければ大きい程、生まれる効果は広範囲に広がるからです。

この社会の中で、人が自由に夢を描いたり、それに対して頑張ることに国籍やルーツは関係ありません。僕 は、日本人だろうが外国人だろうがベトナム人だろうが、子どもが自分の未来に遠慮してほしくないのです。何 もしないのは何かをする以上に危険が伴うことを知ってほしいのです。その為に、まず僕自身が直接社会や日 本人の前で発表し、問題提起し、「行動」します。それにより、国籍や肌の色を超えて、人が人らしく生きていき やすいような変化が日本社会に生まれたらと思います。それが結果的に、子どもたちが夢や目的のために何 事にも挑戦するんだ、という気持ちに少しでも勇気を与えることになれば、それに勝るものはありません。

活動案:「ベトナム難民」を知っていますか?

1. 目標

ベトナム難民について理解を深めてもらうとともに、難民として日本で暮らしてきた当事者から日本人への メッセージを伝えることで、「外国人」と真に向き合うとはどういうことか、考えてもらう。

2. 実践者名

高橋 ひょうま (Nguyen Khanh Thien/阮慶禅)

3. 対象者

高校生以上~一般

4. 時間 30分~40分

5. プログラム進行表

時間	活動のねらい	展開(具体的活動内容)	準備物
10分	ベトナムについて 紹介	自己紹介 パワーポイントでベトナムの紹介 →プリントを配布 →ベトナムコーヒーとハスの花のお茶をふるまう。	PC(パワーポイント) プロジェクター スクリーン ベトナム紹介プリ ント(人数分) ベトナムコーヒー ハスの花のお茶
5分	難民の原因につ いて理解する	質問をなげかける「難民」のイメージは何ですか? →「難民」についてのイメージをワークシートに書 き出してもらう。	「難民」プリント (グループに1枚) ペン
15分	「国を捨てる」 選択と結果につい て理解する	脱国についての具体的な話 資料からの抜粋 自身の両親の話 日本に来た人たちのその後 自身の話 メッセージ 「難民」について新たに知ったことは何ですか? →もう一度「難民」ワークシートに書き足してもらう	

受講者の声

ワークシートに「難民」のイメージを書くのが難 しく、そのことによって、いかに自分が「難民」 について知らないか気づいた。

ベトナム戦争や難民について初めて知ること も多かった。もっと聞きたい。 不退転の思いで来た「難民」の人たち、その 人たちを十分に理解し受け入れていない日本 社会や自分たちに気づかされた。発表した当 事者の歩み寄る「思い」にどう応えていくのか、 自分や日本社会がどう変われるか、つきつけら れた。

